

西洋文化との出会い

文／白崎昭一郎

■第6回 まつだいらしゅんがく 松平春嶽と はしもとさない 橋本左内(下)

隠居謹慎を命じられた松平春嶽は、越前藩の江戸中屋敷の一室の天井に世界地図を描かせ、橋本左内に命じてそれに地名を入れさせ、そこを自分の居室にした。片時も世界から目を離すまいとする春嶽の決意の現れであった。

雨戸を閉じた薄暗い部屋で、春嶽はほぼ四年間、蟄居生活を送った。安政六（一八五九）年十月七日に橋本左内は死罪の判決を受け、二十六歳の生涯を閉じた。春嶽は寵臣の死に際し、何もしやれぬ我が身の境遇を嘆いた。万延元（一八六〇）年三月、大老井伊直弼は、水戸浪士により桜田門外で暗殺された。彼のあまりの独裁と反動的政策が多くの人々の憎しみを集め

ていたためである。井伊の死後、春嶽の謹慎の処置はやや緩くなったが、全く解除にはならなかった。春嶽は読書と瞑想に時を送り、ひたすら自分の修養に努めていた。

その間に時勢は次第に動いていった。幕府の権威は徐々に衰え、朝廷の勢威が少しずつ高まってきた。薩摩の島津斉彬はすでに病死していたが、その弟の久光が志を継ぎ、文久二（一八六二）年一千の兵を率いて上京してきた。久光はこの兵力をバックに、勅使大原重徳とともに江戸へ下って、一橋慶喜を將軍後見職に、松平春嶽を政事総裁職に登用することを幕府に強く迫り、幕府はこれを入れた。こうして春嶽は再び国政の表舞台に立つことになった。

しかし春嶽の前途は多難であった。春嶽は開国の決意を強く持っていたが、時の孝明天皇が攘夷の意向を有し、長州や薩摩のような大藩がこれを支持し、かつ国民多数の意見も攘夷に傾いていたからである。

島津久光は江戸からの帰路、生麦事件を引き起こし、

イギリス人数名を殺傷した。イギリスは強硬に犯人の引き渡しを要求してきた。春嶽は幕府の会議において、「非は明らかに薩摩にあるのだから、箱根で薩摩の一行も留め、犯人を差し出さすべきである」と主張したが納れられず、久光の一行は鹿児島に帰ってしまい、のちに薩英戦争を引き起こすことになる。

一方、上京した將軍家茂や後見職慶喜は、孝明天皇の強い意向や世論の流れに抗することができず、ついに「文久三年五月十日を期して、攘夷を実行します」と約束してしまった。これにより長州藩は、五月十日になると、関門海峡を通る外国船に向かって砲撃を開始した。

こうした風潮に反撥した春嶽は、政事総裁職の辞表を提出し、福井に帰ってしまった。こうした行動を非難する人もあるが、筋を通すことを旨とした春嶽にとってはやむを得ない行為であったのであろう。春嶽の政治目標は、第一には日本を独立国をして維持すること、第二には徳川家を何らかの形で残すことであっ

た。春嶽の眼からみて攘夷は国益を損ない、国を危うくする愚策であった。それゆえ春嶽の政治路線は、公武合体論と開国主義をもって一貫している。

しかも春嶽の政治信条は、豊かな海外情報に基礎を持っていた。春嶽は「大英国志」などの文献も読み、将来は二院制の議会を設け、下院は庶民層からの議員も加えるべきであると、当時としては画期的な構想を持っていた。

慶応二（一八六六）年に山階宮の邸で春嶽に会った薩摩藩士の高崎左京（のちに著名な歌人高崎正風となる）は、春嶽が「万国一天、四海同胞」という言葉を用いたと

証言している。外国人はみな夷狄だという觀念が強かった時代に、人類はみな兄弟という思想を春嶽が持っていたとは驚嘆すべきことである。

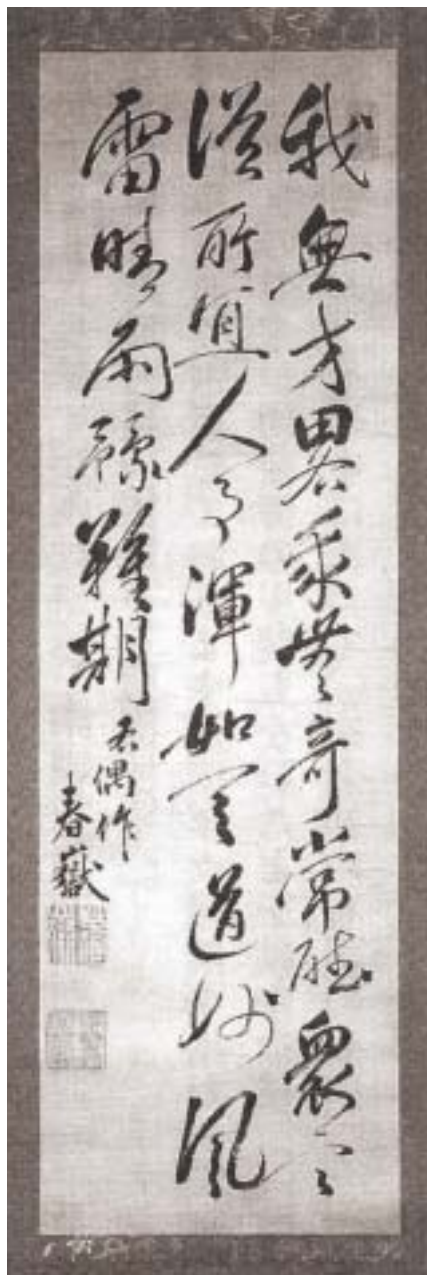
だが優秀な大名を中心に改革を進めようとする春嶽の考えは、次第に通用しなくなり、西郷、大久保、桂など下士階級中心とする倒幕の嵐が吹き荒れた。江戸幕府は倒れ、急激な改革が押し進められた。しかし日清・日露戦役後も際限なく押し進められた海外膨張政策は破綻に終わった。春嶽の説いた漸進的な改革と海外協調の精神が顧みられるべき時勢になっているのではなかろうか。



松平春嶽像（福井市立郷土歴史博物館所蔵）



橋本左内の墓（小塚原回向院）



松平春嶽筆「我無才略云々」（福井市立郷土歴史博物館所蔵）



四老侯肖像衝立（右から春嶽・久光・宗城・容堂）（福井市立郷土歴史博物館所蔵）